
我が親愛なる魍魅魍魎

鏤鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が親愛なる魑魅魍魎

【Nコード】

N8745V

【作者名】

鏤鴉

【あらすじ】

魑魅魍魎。それはおおよそ科学では説明できない存在たちの総称。

これはそんな魑魅魍魎と人間たちのバトルファンタジーである。一応。多分。そのはず。ちょっと自信なくなってきた。だって、みんな遊ぶの大好きなんだもん。

ホワイト・クリスマス（前書き）

ちよつとした、前日譚。

ホワイト・クリスマス

この世界には、多くの“魑魅魍魎”がいる。霊、妖怪、怪獣、天使や悪魔……（これらを魑魅魍魎として良いか悪いか、というのは別問題だ）、これは代表例だが、とにかく沢山いるのである。

何故そんなことが言えるのか？

「そりゃあその魑魅魍魎が、知り合い、知り合いの知り合い、知り合いの知り合いの知り合い、知り合い+（の知り合い）×n………
…そういう具合に、数えきれないほど身近にいるからだ。

先に言っておこう。

俺は凡庸な普通の青少年である。一般大衆の内の一人であり、60億の内の一人に過ぎない。想い出深い出来事、たとえば、運動会や音楽会、入学式や卒業式、友達が出来ただ、その友達と喧嘩しただの、そんなような事しか思い浮かばない、世間一般的、“何処にでもいるような”高校一年生15歳である。

そんな俺が何故魑魅魍魎共と知り合ったか、そこには、世間一般的とは掛け離れた理由が勿論ある。

これは中学三年生の、最後の冬休み。その時に執り行われた、『季節外れの胆試し』の出来事である。

「ふうふう……………」

机に突っ伏し、長々と息を吐く。

本日12月22日10時34分、我が母校『なつき皐中学校』の二期
終業式が終了した。あの無駄に長く、無駄に陰鬱な校長先生の“有
難い”お話が終わった時は、まさに天に飛び立つような心地であっ
た。

「何を一人でぶつぶつと言っとるんだ？ キモいから止めとけ。」
と、唐突に話しかけてきたのは自称「我が親友」である。

「独り言言って皆にキモいと言われるのとお前と会話するの、どち
らが良いかなど、考察するまでもないな」と、毎度毎度変哲のない
憎まれ口を叩く俺。

「……………『言葉の暴力』という言葉を知っているか？」

無駄に爽やかな笑顔。

「『心の傷は体の傷より苦しい』という言葉なら知っている」

言つと更に爽やかさを増し、「フツ……………確信犯か……………。流石
は我が生涯の伴侶」なんて聞き捨てならんことを口走りやがった。

「貴様……………その言葉の意味、知らぬ訳ではあるまい……………。気色が悪
いわ！」

俺は即刻立ち上がり、仰々しく腰に手を当て刀の柄を握る真似を
する。

「我が友にして最高の好敵手、たかはらあおぎり高原梧よ。知っていてその言葉を使
ったに決まっているだろう？」

自称『親友』、上島祭も、同様に腰に手を持ってゆく。

「フン……相も変わらず鬱陶しい奴だ……上島祭。我への侮蔑がどれ程に重い罪か……、今日こそ貴様の体に刻み込んでやろう!!」
と、言うか言わないかのタイミング。俺は祭に手刀を繰り出そうとして、「がふああ!？」と絶叫。俺の額に何者か　と言っても犯人は一人だが　の裏拳がジャストミートしたのだ。

「梓え!!」

俺はのけ反ったまま、その犯人我妻梓の名を叫んだ。

「うるっさあい!!　大声出すなあ!!」

俺のすぐ右にいた梓は、俺以上の大声を張り上げて、俺の脇腹にボディーブローを叩き込んだ。

「まったく……あおくんもまっちゃんも、二学期最終日くらい静かに出来ないの?」

腹立たしげな梓の問い　　と言うか決まり文句　　を、

『出来ん!!それが俺たちだ!!』

俺と祭は見事なハモリで答えた。

『フッ……!!』

俺たちはグッと手を握り合う。親友のつもりはないが、仲が悪いつもりもない。てか寧ろ仲は良いのだ。

「ハア……。」

梓は呆れが溢れ出ている溜め息を吐いた。

因みに、俺の家の左隣は梓の家。そのまた左隣が祭の家。つまりはお隣さんの幼馴染みなのである。実に不本意ながら……。家が遠くて、学校でしか会えないような奴であつたなら、祭も梓も、無二の親友になっていたであろうに。なまじ近すぎるのも問題である。

「ま、おふざけは終いにして、梓は何でここにいるんだ？ わざわざツツコミに来てくれたわけじゃないだろ？」

祭の言葉によつて茶番劇は終幕である。あのまま続けてても面白かつたかもしれないが。

「そりや当然でしょうが。ちょっとね、明明後日に《胆試し》しようつて誘われてるの。で、二人も誘おうかと思つて」

『《胆試し》い？』

再びハモつた俺たち2人の声。

「何だよ、その季節感つて言葉を踏みにじるようなイベントは。てか、明明後日つてクリスマスじゃねえか」

俺はそうツツコミをいれた時には、梓はもうドアの所だった。

「その話は放課後にね〜！ しっかり考えとけよ〜！！」

なんて満面の笑みで叫び、梓は教室を出ていった（梓は隣のクラ

スだ）。

「みんな、座れー！」

それと入れ違いに担任の先生が入ってくる。

「どーする？」

皆が席に着く中で、祭に話し掛ける（祭は俺の前の席だ）。

「どーするもこーするも、梓の性格からして、俺らに拒否権は無さそうだ。でもま、楽しそうだからいいじゃないか」

祭は比較的（比較対象は俺だ）軽いノリだった。

放課後。

「で、どうする？ まあ、来ないって言っても引っ張ってくけど
帰りの通学路で、梓は予想通りのことを言った。

「ま、行くことに異存は無いが……、梓、お前怖い系苦手だろ？」

祭がそう言うと、梓の体がビクンと震える。

「だ…大丈夫！ どうせ臯中の旧校舎だし、出ないよ、幽霊なんて！」

それはつまり“出れば怖い”ということなのだが、梓的には“怖くない”というニュアンスであろうから、ツッコまないでおく（ツッコんだら何されるか、知ったもんじゃない）。

「ともかく！ これで決まり！ クリスマスの夜１１時に臯の旧校舎だからね。それと、ちゃんと先生に許可もらってるイベントだから、心配は無用よ」

企画、準備に関わってないであろう梓は胸を張った。

てか、クリスマスにわざわざ学校側に申請してまでこんな事をしようなど、寂しい奴らである（俺もその一人なのだが）。

「ま、これには恋人作りとしての側面が、少なからずあるんだろうけどな」

祭が再び無駄に爽やかな笑顔で、『それを言ったらお仕舞いよ』なことを言った。

小さな男の子がいた。近所の公園の砂場で、ただ一人で。楽しそうでも、つまらなそうでもなく、全くの無表情で砂山を作っていた。

『何してるの?』

一人の女の子が、その子に話し掛けた。

『……………』

男の子は返事どころか、身動き一つしなかった。

『……………』

女の子はその子に向かってニッコリと笑うと、その子の向かいに座って、砂山作りを手伝い始めた。

『……………』

それから二人は、会話一つ交わすことなく、砂を積み続けた。
一方は無表情に、もう一方は本当に楽しそうに。

「起きろオオ!!」

突如、鳩尾に凄まじい衝撃が走った。

「あっ……がっ……………っ……………!?!」

呼吸も儘ならないままに周りを見ると、犯人（確定的）我妻梓と、呆れ顔の上島祭が俺の寝ているベッドの脇に立っていた。

「何であおくんはこんな時間に寝てんのよお!!」

訳の解らないまま突き出されたケータイの待ち受けを見る。この臯ではかなり希少なケータイである。

「12月25日10時36分……」

そう言えば晩飯終わってちよつと仮眠摂ろうと………今日何かあったっけ？

「きいもおだあめえしい〜!!」

梓が俺の両頬を思い切りつねった。俺の叫びはきつと天を衝くほどのものであっただろう。

「文句は後でもいいだろ。遅刻するぞ？」

祭がさっきより呆れの色を強めて言う。ちなみに、学校までは20分掛かる。

「ほーら、急いで立って!!」

梓が無理矢理に俺を引っ張っていく。俺はされるがままに（その方が楽だ）、学校に向かった。

で、臯中旧校舎。

「お、ようやく来たな！」

梓の友人（名前は知らない）が、待ちかねたように（実際待ちかねたんだろうが）駆け寄ってきた。

「結構：いや、かなりいるな……」

祭が戸惑った風に言った。

いたのは30人ほど、男女比は半々くらいか。確かに驚愕の人数だ。

「寂しいなあ……」

俺が率直に述べると、何人か身動いだ。やはり彼氏彼女と過ごしたかったんだろうな。ま、そんなのいればここにいないだろうが。

「よし、全員来たな？　ここにくじがあるから引きに来てくれ！　ペア作るぞ……！」

旧校舎玄関前に何人かが立ち、集まった奴らに指示を出す。アイツらがこの聖なる夜に独り身の虚しさを紛らわせるためのイベントを企画したのか。よくやったと言うべきなのだろうが、それは称賛なのか皮肉なのか……。

「おい、これはどういう意味だ？」

俺の引いた紙には《一人》と書いてあった。

「それはまんまよ。今回３３人集まったから、一人余るの」

箱を持っていた娘が説明してくれた。

「３３人集まることが分かったのなら、三人一組にすれば良かったんじゃないのか？」

そうすれば１１組で丁度割り切れたのに。

「……………」

その娘はたちまち困ったような顔になり、

「や…やっぱりこういうのって、ペ、ペアが基本だし！」

たどたどしくそう答えた。

OK、成る程。気が付かなかったのね。

「いいよ、別に。一番最後じゃなければ」

皆の待つ中一人で胆試しに興じるなど、笑い話にはなるうが、あまりにも恥ずかし過ぎる。俺はそこまで勇者じゃあない。

「あ、そこは大丈夫。心境を考えて、一番先に終わってもらってから。つまり一番最初」

「はいはい。アリガトさん」

そこを考慮する暇があるのなら、三人一組でピッタリだと早く氣付いてもらいたかったものだ。

「何だよ、つまらん奴だな」

そんな俺を祭はすこぶる楽しそうに出迎えた。相も変わらねーさわやかな顔をしゃがって。

「何なら変わってやろうか？ 思いつ切り笑ってやるよ」

是非とも無償で譲渡する所存である。

「馬鹿言っな。俺はそこまで勇者じゃねえよ」

どうやら俺たちの思考パターンは似通ってるらしかった。

「つまらん……」

この胆試しは、旧校舎の理科室、音楽室、図書室、用具室の四ヶ所を回る、というもので、現在は最上階、四階の理科室を残すのみだ。

にしても、

「つまんねえ」

隣に話し相手はいないし、幽霊、妖怪、その他の類いも勿論ない。何が面白いと言うか。

「これなら、来なくても良かったんじゃないか？」

俺が来なければ32人で丁度だったのだ。もしそれでなくても、俺が梓以外の女子と楽しく会話出来るとは思えない（この胆試しに集まったのは、男子17人女子16人だ。それが偶然か図られたことかは分らんが）。

「そーだよな、俺が行かなきゃ誰かが一人で、なんて状況にもならず、あの夢の続きも……」

そこまで言ったところで言葉が消えた。

そうだ、あの夢……。一体何だったんだろう。

あの男の子は俺なんだろうが、女の子の方に見覚えが無い。それに、確かにあの頃の俺は無口で無愛想で、誰とも 梓や祭とも仲良くしない生意気なガキだったけど、全くのノーマリアクションなんてことはしなかった、てかそれ以前に、そこまで徹底した人嫌いじゃなかった。

ゴトン

四階まで上がった時、その思考を遮るように、“理科室の方向か

ら”物音が聞こえた。

「まさか……な……」

そうだよな、幽霊、妖怪、その他の類いなんて、まさかいる筈が無い。

先に言っておこう。梓にああ言ったが、別に俺は幽霊、妖怪、その他の類いが“怖くない”わけじゃない。テレビの心霊特集なんかを見た後、つい後ろを振り返ってしまうようなchickenだよ。いや、俺がchickenだとかkitchinだとか以前に、この状況下で“恐怖”という感情を抱かない人間がどうか、いやいまい。いやいまい！

大事な部分だから二度言った。え？ 心理描写が長過ぎる？ 喧やかましい！ 何かしてないと不安なんだよ！

ガタガタガタツ！！

再び俺の思考は遮られる。

「……………行くか」

それによつて踏ん切りがついたようだ。

確かに怖い。だが！ 逃げたとなれば少なくとも卒業するまでの三ヶ月はネタにされる。それだけは避けねばならない！！

え？ さつさと行け？ 喧しい！ 決心した後が一番躊躇うもんなんだよ！

「で、理科室前」

取り敢えずナレーション。

ちなみに、理科室からはガタガタツって音と話し声みたいなのが聞こえてる。

「……………」

ドアに掛けた手が動かない。その時脳内では開けなくてもよい理由を懸命に模索中である。まさか俺がここまでchickenだったとは、驚きだ。

ガラッ！

そんなchickenである俺が　え？“chicken”使い過ぎ？　二の足を踏んでいると、ドアが勢いよく開かれた。

「……………」

かなり長めの沈黙。

俺の目の前にいたのは　つまり、このドアを開けたのは　、
紛れもなく、人体模型であった。

「ギヤアアアアアア！！！！？」

我がプライドの為に言うと、この叫びを上げたのは人体模型である。

『ギヤアアアアアア！？』

するとその後ろにいた骨格標本、カブトガニの模型、地球儀
何で？ …… e t c、が俺に気付きました叫びを上げた。

「……………」

その時俺は声を上げるのも、腰を抜かすのも、そもそも驚くこと
すらも忘れ、ボーゼンとしていた。何故なら、その人体模型その他
諸々が、不思議な踊り 言葉での形容は不可能そうだが、敢えて
言葉にするなら、“盆踊りと阿波踊りとドジョウ掬いをかけて（数
学的な意味で）、13で割ったら8余ったような”……言ってて訳
解らんな をしていたからだ。

「くくつ……」

その滑稽な舞いを見ているとつい笑ってしまった。
でも、その笑顔も直ぐに掻き消される。

「……………っ！」

俺の懐中電灯の光が照らす先には“真っ白”な女の子がいた。白
磁の肌、そして白髪のような、色の抜けた白とは違う、白“色”の
長髪。漆黒のワンピースと、もたれ掛かっている教卓の濃い焦げ茶
色と、懐中電灯の淡い橙の光が、それを更に際立たせていた。

だがそれよりも圧倒的に、絶対的に、心の奥に何かが引っ掛かる。
いや、引っ掛かると言うより突き刺さる。
チクリと、いや、グサリと。

「き、君って、え、えつと、き、胆試しの子だよな？」

件の人体模型が明らかに焦った表情 は無いのだが、とにかく

焦ってはいる　で話し掛けてきた。

「あ、ああ……って、やっぱり何かしらのトリックなんだな？」

少し、いや、かなり安心する。

と、

「いや…その……」

「ゆ、言うわけにはいかないだろ！」

「でも後で詮索されても……」

一体何が議題なのかは分からないが、とにかく俺は蚊帳の外のようにうだ。

なので、取り敢えず机に寄り掛かっている女の子を見る。

「……………」

綺麗だった。でもそれは、例えば美術品なんかを抱くそれと同義なもので、欲情とか、そんなものとは無縁の、純粹な感想だった。

「んん……………」

殆ど無意識的に、彼女の頬に触れた。するとくすぐったそうに身動きして、その顔に微笑みが浮かんだ。

「ああーっ！」

もう頭から半ば抜け落ちていた人体模型たちが突然大声を出す。

「な、何だよ！ いきなり！」

し、心臓がドキドキ言ってんじゃねえか……。

「ご、ごめんね。その子、いろいろと事情があるから……」

「事情？」

明らかにさつき以上に焦っている人体模型を睨む。

「女の子をこんな所に軟禁する事情って、一体何だよ」

ん？　なんか俺、コイツらと普通に話せてないか？　いや、色々と言わなきゃならんことがあるだろうよ。

「そ…それはあ　ドンツ！！！」

人体模型の言葉を遮るように、突如轟音が響いた。一体何が起きたのかなど分からない。取り敢えず今の状況を説明すると、『理科室の天井と壁が爆発によって大破し、床も同じようになりつつある』ということだ。

「き、君！」

啞然としていると、人体模型に呼ばれた。

「彼女を連れて早く逃げて！お願い！」

「え…え!？」

意味が理解出来ないでいると、大破した壁の付近、もうもつと上がる煙の中から巨大な“何か”が、のっそりと現れた。

「よもやこのような片田舎に居ったとはのお……」

くぐもった、まさにファンタジー映画のモンスターののような声の主、現れたそれは、まさにファンタジー映画のモンスターののような、巨大な赤いトカゲだった。

「サ…サラマンダー……。まさかこんなのが来るなんて……!」

人体模型たちがざわざわと騒ぎ出す。

「ふふん…“白亜”の確保なのだ……。万全を期すのは当然だろうて」

“はくあ”？ あの娘を見やる。この娘の名前なのか？ “はくあ”が“白亜”なら、なるほど分かりやすい名前だ。名は体を表すというか。って、そんなこと言ってる場合じゃなさそうだ。

「分かった！ 安心しとけ！」

白亜 もうこれが名前でいいや を、所謂“お姫様抱っこ”で持ち上げ、理科室を飛び出した。

ボウウウウツ!!!

飛び出した刹那だった。赤銅色の炎が、俺がさっきまでいた空間を飲み込んだ。

「人体模型えっ!!」

なんか緊張感が無いな、なんて場違いなことで、逃げ切れなければ死ぬかもしれないという恐怖。この二つを抱きながら、全速力で階段を目指す。

「人間風情が愚かな真似を……!」

バキバキという木材の軋む音を響かせて、炎の中からトカゲが歩いて俺を、いや、白亜を追ってくる。

「これがどういうことかはもうどうだっていい! 早く安全なトコまで!」

自分を勇気づける為にそんな独り言を叫びながら（独り言は癖である）、古びた廊下を疾走する。

担いでいる女の子、白亜は随分と軽い。女の子ってこんなものなんだろうか。それに肌もなんかすべすべだし、今持つてる太ももは、なんか……こう……ふにふにと……。それに今の時期にはかなりおかしい薄手のワンピースの胸元は、前屈みの姿勢の為か、その……谷間が形成されてるわけで……。しかも結構大きいし……。

さっきは『欲情とか……』なんて言っただけど、今は欲情にまみれてるよ、俺! しゃあねえじゃん! 今まで俺、梓以外の女の子と、まともに話したことないし! それに素肌なんて、梓のだって触ることないし! いやまあよく殴られてるけどさ、ミニスカートから覗く太ももとか見てるけどさ!

「あ……」

なんて考えていたら、なんと階段を通り過ぎてしまった。

この旧校舎は、一直線の廊下の真ん中の位置に階段がある、という構造になっている。ちなみに理科室は廊下の端にあり、そこからあの化け物トカゲが追いかけてきている。階段を通りすぎた、ということとは、俺、もとい俺たちは、袋小路に閉じ込められた、ということだ！

「って、冷静に考察してる場合かぁーっ！！」

半ば自暴自棄に、理科室とは真反対の位置にある教室のドアを蹴破って、その中に駆けずりこんだ。見回してみると、どうやらこの教室は調理室らしい。

「愚かな……どうせ死ぬ命、足掻くだけ虚しいだけだろう……」

ドアを周りの枠ごと破壊しながら、トカゲが調理室に入ってくる。

「アドバースどうもアリガトさん。でも、だからこそ足掻くんたろ？ 若さってのは後悔を恐れず突き進むことだってじいちゃん言うてたからな！」

無論ただの強がりなわけだけど、でも、成り行きからでも『女の子を守る』という立場にいる自分が、その子の前で弱気になっちゃいけない、なんて思った。

長いため息を吐き出したトカゲ。

「それは“若さ”ではない……幼稚と言うのだ……！」

そして、大きく息を吸う。

まさかさっきの理科室みたく炎を吐く気か！？ この娘を狙ってるんだろ？ この娘も一緒に死んでしまうぞ！？

「業火に焼かれる苦痛にまみれて、死ぬといい！」

息を吸ったままの状態で、どういう仕組みなのかそう言った。

俺は、逃げることも、叫ぶことも、呼吸することさえ忘れていた。眼前に迫り来る炎。最早絶対と言える“死”。怖いかと訊かれたら怖いんだろう。でも、今の俺にはそれは感覚出来なかった。

「わあああああああつ！！！」

ようやく絞り出した声。それは恐怖のためじゃない。俺を鼓舞するためだ。

ドア、出口に向けて走り出す。だが炎の波は大きく、その出口ももう燃やされてしまっただろう。つまり間に合わない。ゲームオーバー！。

「大丈夫だよ」

か細いけど、芯の通った声だった。

「う…あ……」

気が付くと、炎は掻き消えていた。

「ちい……目覚めたか……！」

トカゲが忌々しげに齒ぎしりする。声の主は白亜だった。こちらを見てニコリと微笑んでいる。そして、あのトカゲに向けて手のひらを差し出した。すると白亜の手が赤く光り、炎がそこから沸き上がる。それは床を焦がしながらトカゲを飲み込んだ。

「ふ……サラマンドーに炎が効くとも思ったか」

だが炎が霧散した跡に、トカゲは無傷で立っていた。そして、のっそりと歩み寄ってくる。

ベキベキッ！！

「えっ！？」

その音が聞こえた時にはトカゲが見えなくなっていた。そしてまたもベキベキという音と、ズシンと地面にぶつかった音。あのトカゲは床を突き破って、そのまま一階まで落ちていったのだ。

「そらそうだ……普通に歩くだけで床が悲鳴を上げるんだ。炎に焼かれて脆くなってたここは耐えられないよな。しかも落下エネルギーも付随されて、か」

ならこの娘はそれを計算してさっきのあれをしたのか？ いや、それ以前にあれは何だったんだ？

ピーポーピーポー……

消防か警察か、その両方か。けたたましいサイレンが次第に近付いてくる。

「ちっ……！」

するとここからでも悔しがってるのが分かる表情で、トカゲは森の方へと消えていった。

「終わった……のか……」

力無くへたり込む。頭が上手く回ってないが、つまりもう安全ってわけだ。

「あおくん……」

ふと、白亜が呟いた。

「あおぎりくん……！」

どんどん表情が明るくなっていく。

「ああ……そだけど……うわっ！？」

そう答えたのとほぼ同時に、白亜が俺に抱きついた。

「あおくんだあおくんだあおくんだあー」

俺に頬擦りしてくる白亜。

「わ…ちよっ！　なんなんだよお前は！　って首絞めてる首！」

さっきまでの緊迫はどこへやら、子犬がじゃれ合っようにじたばたとする俺たち。

とまあ、これが一番最初。俺と白亜との出会いだ。

そして、これから《魑魅魍魎》たちと出会っていくわけである。

ホワイト・クリスマス（後書き）

厳密には魑魅魍魎と知り合っていないのは内緒。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8745v/>

我が親愛なる魑魅魍魎

2011年10月9日18時29分発行